

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02508

研究課題名(和文)大量死の記憶と亡霊の演劇に関する総合的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Study on Memory of Mass Deaths and Theatre of Ghosts

研究代表者

伊藤 ゆかり (ITO, Yukari)

山梨県立大学・国際政策学部・准教授

研究者番号：80223197

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：二つの世界大戦の記憶が風化しつつある一方で、我々は、内戦やテロリズム、自然災害による大量死の脅威と向かいあっている。大量死は、生命を脅かすだけでなく、犠牲者の数ばかりを強調し、彼らひとりひとりの生と死の意味が忘れ去られる危険をもたらす。本研究は、この危機に対抗し、死者を亡霊として描くことで、大量死の犠牲者たちの記憶を新たにし、同時に大量死の背景を暴こうとする演劇の可能性を追求することを目的とした。主として初期近代英国演劇および現代英語圏演劇について、日本演劇も取り上げつつ、歴史・社会状況に対する広い視座をもって緻密な分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として最も重要なものは、大量死を描く演劇の枠を広げたことである。大量虐殺を描く劇の研究が多いなか、本研究は、自然災害による大量死の社会的・経済的・歴史的要因を追求する劇を検証する必要性を示した。頻発する自然災害にくわえて、コロナ感染拡大およびウクライナ侵攻によって、だれもが大量死の犠牲者となりうる今、その脅威に対抗しうる演劇の可能性と社会的役割を検証する本研究の社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：We are now faced with the crisis of memory of the deceased. While memories of two world wars have been dying out, we have felt the threat of mass deaths caused by civil wars, terrorist acts, natural disasters, and others. In addition to the loss of our life, mass deaths deprive us of the meaning of our life by emphasizing the number of victims and erasing memories of their lives. Our study has aimed to pursue the potential of theatre against the threat of colossal loss, which awakens our memory of victims as well as reveals the causes of mass deaths through representation of ghosts on the stage. We have mainly conducted close investigations into early modern English plays and contemporary plays written in English, with some examinations into contemporary Japanese theatre, from a wide historical and social perspective.

研究分野：現代アメリカ演劇

キーワード：演劇 亡霊 記憶 大量死 比較演劇 戦争 災害

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の契機は、東日本大震災およびそれによって起きた福島第一原子力発電所事故である。大震災によって、災害後の混乱時における演劇上演の意義が問われ、演劇の社会的役割に関する再考を促された。同時に、原発事故の被害は、原子力に依存しつつ、核兵器の脅威のもとにある現代社会の見直しを迫るものであった。この問題意識に基づき、戦争などによる大量虐殺を題材とした劇と自然災害による大量死を描く作品双方を検証する研究を始めた。大量虐殺を描く劇の研究に対して、自然災害による大量死を題材とした劇の研究は未だに少ない。しかし、2005年のハリケーン・カトリーナと東日本大震災が示すように、自然災害には歴史的・経済的・社会的要因が複雑にからみあうことから、大量虐殺と同様に、自然災害による大量死を描く演劇の検証は必須である。本研究グループのメンバーである伊藤ゆかり、堀真理子、小菅隼人は、研究分担者の常山菜穂子と研究協力者の楠原偕子とともに、2014年から3年間基盤研究(C)(一般)として「大量死の記憶と演劇的想像力に関する総合的研究」を行った。研究メンバーそれぞれの専門分野において大量死を描く戯曲を分析するとともに、東日本大震災に関するドキュメンタリー映画に関するシンポジウムを実施し、異なる芸術分野における検証をも含めた研究成果を上げた。しかし、研究対象と考察すべき観点が広範囲に及ぶため、さらなる発展をめざして本研究を開始した。

(2) 芸術の社会的役割のひとつとして、死者の姿を伝えることが挙げられるが、戦争などによる大量殺戮や自然災害による大量死の犠牲者の生と死を後世に伝えることは、とりわけ大きな困難を伴う。その困難にもかかわらず死者の記憶を伝えることは、「記憶の記録装置」としての演劇にふさわしい役割だといえよう。演劇は、「その文化が生みだした風土、氏族、政治、経済、精神が意識的あるいは無意識的に織り込まれた、言うなれば集団的記憶装置」であるという、常山の明快な定義は、2014年以来の研究の礎である。演劇は、一人一人の人間の生を含めた世界全体を記録し、それを観客の記憶に残す。本研究は、個々の劇がどのように大量死の「記憶の記録装置」として機能しているかを分析するものである。

さらに、本研究においては、記憶を観客に伝える亡霊の表象に注目した。Anne McClintockは、帝国主義的な国家が、みずからの暴力を忘れ、隠蔽しようとしても、亡霊が何らかの形をとってあらわれ、その責任を思い出させようとする、と論じている。隠蔽された暴力を暴き出すことは非常に難しく、暴力が明らかになる時ですら、かろうじて判別できる、亡霊のようなものとしてあらわれるのである。亡霊は弱々しい存在ではあるが、影のように生者につきまとうことで、死者の悲しみの記憶を伝え、加害者を糾弾し続ける。それゆえに、本研究においては、大量虐殺・大量死の原因を明らかにする亡霊のような存在が描かれる演劇を検証した。

2. 研究の目的

第一に、亡霊をとおして大量殺戮・大量死の犠牲者たちの記憶を伝える劇を検証することで、大量死の脅威に対抗する演劇の可能性を明らかにすることをめざした。影のような亡霊の姿を見つめ、声をきくことは難しいが、難しさゆえになおさら、彼らが伝えることは観客の記憶に強く残る。大量死は、一人一人の人間の生と死の意味を奪い、犠牲者を非人間化するが、彼らの記憶が観客に伝えられるとき、人間性を回復することができるのである。それは、大量殺戮や大量死を防ぐことにつながるかもしれない。本研究は、このような演劇の社会的役割を明らかにすることを目的とした。

もう一つの重要な目的は、大量死を描く演劇の枠を広げることである。暴力による大量死を描く劇と自然災害による大量死を描く作品の両方を扱うことで、演劇において新たな系譜を見出すことをめざした。達成が難しい目的であるが、研究を継続することで大量死および演劇の本質に迫りたい。

3. 研究の方法

(1) 本研究グループ3名は、研究協力者となった常山、楠原(2018年まで)および新たに参加した穴澤万里子とともに研究会を行っており、そこでは二つの方法で研究を進めた。ひとつは、研究書を読むことで、研究における重要な概念に関して共通理解をはかることである。演劇における亡霊についてさまざまな角度から論じた論文集、*Theatre and Ghosts: Materiality, Performance and Modernity* (2014)を精読したほか、小菅が研究を進めているシェイクスピア劇における大衆と権力構造を念頭に、オルテガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』を読んだ。

また、大量死の演劇に対する一般読者の関心を高めるために、上記5名による戯曲の翻訳および作品に関する論文から成る書籍の出版をめざしており、その準備を行った。伊藤、堀、穴澤がそれぞれ翻訳する作品について報告をした。

(2) ベオグラードで開催された国際演劇学会(IFTR)2018年次大会において、“Theatre of Ghosts and the Other under the Threat of Mass Death”という統一テーマのもとパネル発表を

行った。司会の小菅が全体を統括し、伊藤、堀、楠原が発表を行った。

(3) 研究メンバーそれぞれの専門分野において、大量死、大量虐殺に関する戯曲の分析を行い、研究発表、論文執筆などを行った。伊藤は現代アメリカ演劇、堀は20世紀英米アイルランド演劇、小菅がシェイクスピアを中心とした初期近代イギリス演劇を専門とする。この3名に、19世紀から20世紀にかけてのアメリカ演劇を専門とする常山、1960年代アメリカ演劇および現代日本演劇を研究対象とした楠原、フランス演劇及び象徴主義演劇を主な専門とする穴澤が加わったことで、研究はさらなる広がりをもった。

上記に加えて、小菅は日本の演劇プロデューサーおよび舞踏家へのインタビューを行い、舞踏の歴史とコロナ禍における日本演劇に関して基盤となる研究を進めた。

4. 研究成果

(1) 研究成果として、まず論文を紹介したい。伊藤はポーラ・ヴォーゲル、スーザン＝ロリ・パークス、ネイオミ・ウォレスなどの現代アメリカ女性劇作家、堀はサミュエル・ベケットを中心にキャリル・チャーチル、デビー・タッカー・グリーンといった現代イギリス女性劇作家、小菅はシェイクスピア劇を取り上げ、大量死、記憶または亡霊の視点から作品を分析した。また、常山は20世紀初頭のハーレム・ルネサンス期における演劇を人種の観点から分析し、穴澤はメーテルリンクと日本演劇との関係に関して著書を出版するとともに、研究発表を行った。

それぞれ優れた論考を発表したが、ここでは伊藤の論文「パークスが描く亡霊としてのヒロイン」を取り上げる。直接的に大量死を扱ってはいないが、亡霊がいかに暴力を明らかにするかを検証した例として紹介したい。この論文で伊藤が論じた戯曲は、19世紀におけるもっとも有名なアフリカ人女性とされるサーティ(セアラ)・パートマンを主人公とした、スーザン＝ロリ・パークスの『ヴィーナス』(1996)である。パートマンは、「ホットtentott・ヴィーナス」としてロンドンとパリで見世物として評判をとり、死後は遺体が解剖され、性器と脳はパリの国立自然史博物館で陳列されるという、犠牲者としてのアフリカ黒人女性の体現のような人物である。パークスは、彼女の生涯を見世物小屋で演じられる芝居のように描き、それによって観客は視線のもつ暴力性ととも、自分たちも暴力的なまなざしをパートマンに向けていることに気づかされる。さらにパークスは、31の短い場面としばしば挿入される劇中劇によって、劇を断片化することで、パートマンがどのような人間なのか掴みにくくしている。生前も死後も見世物として暴力的なまなざしの対象となり、劇の中ですら実体がつかみにくいパートマンは、亡霊のような存在なのである。それでもパートマンは劇の主人公となることで、亡霊としてアフリカおよびヨーロッパの歴史につきまとい、無数の犠牲者を生んだ植民地主義と女性の搾取を糾弾し続ける。このように、伊藤の論文は、亡霊が可視化する歴史のなかの暴力という観点からパークスの劇を分析した。

(2) 前述した国際演劇学会2018年大会におけるパネル発表は非常に重要な研究成果である。伊藤は“The Theatre of Mobility and Stasis of Toshiki Okada”というタイトルで、東日本大震災後の日本人の心理状況を反映する岡田利規の戯曲をとおして、災害後の移動と舞台空間の関係を論じた。堀は“Some Ethical Thoughts on Plays of Genocide”と題し、大量虐殺に直面した加害者と被害者双方の他者化と倫理性を追求する英米戯曲を論じた。楠原は、“Two Works of Memories and Ghosts Set in Decades after Nazi’s Holocaust”というタイトルで、ホロコーストに関するドキュメンタリー映画『ショアー』およびイスラエルの家族をとおしてホロコーストを描く古川健の戯曲を論じることで記憶の警鐘を検証した。また、堀は発表内容を元にして論文にまとめた。

本研究の対象が多岐にわたることを反映するとともに、研究において特に重要な点をバランズよく論じたパネルとなった。すなわち、堀の発表は劇における亡霊の重要性を論じつつ、観客が犠牲者と「犠牲者になった」加害者双方に共感する可能性と必要性を訴えた。また、伊藤が自然災害による大量死を描く劇を取り上げたのに対して、楠原はホロコーストを題材とした映画と日本演劇を論じた。二人は、第二次世界大戦と東日本大震災の記憶をもつ日本人研究者として取り組むべき研究課題を提示したといえよう。パネル全体をとおして、大量死の演劇という枠組によって、いかに多様な検証が可能かを示した。参加者からは活発な質問と示唆に富む意見が寄せられ、本研究テーマの重要性を参加者と共有することができた。

(3) 本研究グループは、2023年度から基盤研究(C)(一般)として、「大量死と隔絶の脅威に対抗する記憶と共有の演劇に関する総合的研究」という課題名による研究に着手した。それを念頭に、小菅が行っているインタビューについて、今後の研究の中に位置づけたい。本研究を始めた2017年時点では、当然のことながら、ロシアによるウクライナ侵攻による大量殺戮も、新型コロナウイルス感染拡大による大量死もまったく想像をしていなかった。前者は、核の脅威を多くの人に感じさせることとなり、東日本大震災とは異なる形で社会における核の問題を考えるよう促している。他方、コロナ禍は、演劇及び演劇研究に大きな影響を与えている。身体的接触によるコミュニケーションが危険なものとなされ、劇場上演が中止となり、オンライン演劇の道を探る時期を経て、演劇がどのような変質を遂げたのか、現時点ではうかがい知れない。小菅によるインタビュー、特に舞踏家に対するインタビューが示しているのは、彼らが同じ舞踏家や観

客らとさまざまなものを共有して創作を行っていたことである。時代の雰囲気や共有し、一緒に過ごす時間と空間を共有するなかでこそ生まれた作品があり、それが演劇の可能性を広げたことを、小菅は、インタビューならではの生き生きとしたやりとりをおして明らかにしている。このような史的資料を参照しつつ、演劇において最も重要である共有が一時期不可能となったことが演劇に与える影響を研究する必要がある。同時に、ウクライナ侵攻をはじめとする現在の、そして今後おこりうる戦争や内戦がもたらす危機を念頭に研究を進め、大量死に対抗する演劇の可能性を追求したい。

< 引用文献 >

近藤光雄、常山菜穂子他、慶應義塾大学出版会、記憶を紡ぐアメリカ：分断の危機を超えて、2005、354（193 - 230）

Anne McClintock, Imperial Ghosting and National Tragedy: Revenants from Hiroshima and Indian Country in the War on Terror, PMLA, 129.4, 2014, 819-29

伊藤ゆかり、パークスが描く亡霊としてのヒロイン、山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要、第15号、2020、1 - 10

Mariko Hori, Theatre of Ghosts and the Other under the Threat of Mass Death: Some Ethical Thoughts on Plays of Genocide, 青山経済論集、70巻4号、2019、3 - 12

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 16件）

1. 著者名 伊藤ゆかり	4. 巻 第18号
2. 論文標題 『この平らな地球』における暴力の痕跡	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要	6. 最初と最後の頁 33～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小菅隼人	4. 巻 第37号
2. 論文標題 北方舞踏派・鈴蘭党研究(2) 舞踏家鈴木美紀子に聞く	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要H-37：人文科学	6. 最初と最後の頁 175～203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小菅隼人	4. 巻 第54号
2. 論文標題 京都で踊るといふこと 舞踏家今貂子に聞く	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 51～73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 伊藤ゆかり	4. 巻 第17号
2. 論文標題 谷賢一『福島三部作』における「わが町」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要	6. 最初と最後の頁 25～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堀真理子	4. 巻 第14号
2. 論文標題 Waiting for Godotにおける「存在の不安定さ」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関東英文学研究	6. 最初と最後の頁 1~9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小菅隼人	4. 巻 第36号
2. 論文標題 土方最後の弟子 舞踏家正朔に聞く	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要H-36: 人文科学	6. 最初と最後の頁 169~216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小菅隼人	4. 巻 第72号
2. 論文標題 コロナ時代の演劇について(2) 演劇プロデューサー高萩宏に聞く	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本演劇学会紀要: 演劇学論集	6. 最初と最後の頁 73~104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小菅隼人	4. 巻 第53号
2. 論文標題 北方舞踏派・鈴蘭党研究(1) 舞踏家諸環毘沙(長谷川希誉子)に聞く	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要: 言語・文化・コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 35~62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤ゆかり	4. 巻 第16号
2. 論文標題 ウォレス劇における生者と死者の身体性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要	6. 最初と最後の頁 15～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小菅隼人	4. 巻 52号
2. 論文標題 金沢で踊り続ける 舞踏家山本萌・白榊ケイに聞く	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 55～92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小菅隼人、細川展裕	4. 巻 71号
2. 論文標題 コロナ時代の演劇について 演劇プロデューサー細川展裕に聞く	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 演劇学論集：日本演劇学会紀要	6. 最初と最後の頁 85～115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤ゆかり	4. 巻 第15号
2. 論文標題 パークスが描く亡霊としてのヒロイン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要	6. 最初と最後の頁 1～10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mariko Hori	4. 巻 第71巻3号
2. 論文標題 Hamm's Ambivalence in Endgame, a Post-catastrophe Play	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青山経済論集	6. 最初と最後の頁 1~13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤ゆかり	4. 巻 第14号
2. 論文標題 歴史と演劇をつなぐ：ポーラ・ヴォーゲルの試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要	6. 最初と最後の頁 1~10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mariko Hori	4. 巻 70巻4号
2. 論文標題 Theatre of Ghosts and the Other under the Threat of Mass Death: Some Ethical Thoughts on Plays of Genocide	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青山経済論集	6. 最初と最後の頁 3~12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤ゆかり	4. 巻 第13号
2. 論文標題 現代劇作家が見つめる南北戦争	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要	6. 最初と最後の頁 11~20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 穴澤万里子
2. 発表標題 メーテルリンクと能
3. 学会等名 日仏演劇協会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mariko Hori Tanaka
2. 発表標題 Hamm's Ambivalence in Endgame, a Post-catastrophe Play
3. 学会等名 The International Federation of Theatre Research World Congress Shanghai 2019, Samuel Beckett Working Group (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hayato Kosuge
2. 発表標題 Curated Panel: Performing the Emperor and the War-Heroes in the Context of Deification and Demystification Post-WW2 Tokyo
3. 学会等名 The International Federation of Theatre Research World Congress Shanghai 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小菅隼人
2. 発表標題 『再び<自然的身体と象徴的身体>の連接・融合・分離をめぐって』問題提起
3. 学会等名 日本演劇学会分科会西洋比較演劇研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yukari Ito
2. 発表標題 The Theatre of Ghosts and the Other under the Threat of Mass Deaths: The Theatre of Mobility and Stasis of Toshiki Okada
3. 学会等名 The International Federation of Theatre Research World Congress Belgrade 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mariko Hori Tanaka
2. 発表標題 The Theatre of Ghosts and the Other under the Threat of Mass Deaths: Some Ethical Thoughts on Plays of Genocide
3. 学会等名 The International Federation of Theatre Research World Congress Belgrade 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomoko Kusahara
2. 発表標題 The Theatre of Ghosts and the Other under the Threat of Mass Deaths: Two Works of Memories and Ghosts Set in Decades after Nazi's Holocaust
3. 学会等名 The International Federation of Theatre Research World Congress Belgrade 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小菅隼人、企画・研究発表・司会
2. 発表標題 <演劇にみる《王の二つの身体》 軍神、天皇、Kaiserin >問題の所在
3. 学会等名 日本演劇学会分科会西洋比較演劇研究会例会パネルディスカッション
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mariko Hori Tanaka
2. 発表標題 Beckett's Legacy in Caryl Churchill's Late Plays
3. 学会等名 Samuel Beckett Working Group Meeting "Beckett Influencing/Influencing Beckett" (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 Mariko Hori Tanaka, Michiko Tsushima, Yoshiki Tajiri, Jean-Michel Rabate, Llewellyn Brown, Naoya Mori, William Davies, Jeff Fort, Laura Salisbury, Trish McTighe	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 232
3. 書名 Samuel Beckett and Catastrophe	

1. 著者名 Mariko Hori Tanaka, Nicholas E. Johnson, Svetlana Antropova, Linda Ben-Zvi, Jonathan Bignell, Thirthankar Chakraborty, Laurens De Vos, S. E. Gontarski, Anna McMullan, Melissa Nolan, Cathal Quinn, Everett C. Frost, Kumiko Kiuchi, Yoshiko Takebe, Michiko Tsushima, et al.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 341
3. 書名 Beckett's Voices / Voicing Beckett	

1. 著者名 Mariko Anazawa	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Harmattan	5. 総ページ数 191
3. 書名 Maeterlinck et les Japonais	

1. 著者名 常山菜穂子、深瀬有希子、中垣恒太郎、松本昇、有光道生、鶴殿えりか、奥田暁代、大和田俊之、古東佐知子、佐久間由梨、竹谷悦子、田中正之、松田智穂子、三宅美千代、森あおい、山下昇他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 610
3. 書名 ハーレム・ルネサンス <ニュー・ニグロ>の文化社会批評	

1. 著者名 Mariko Hori Tanaka, Anita Rakoczy, Nicholas E. Johnson, Patrick Armstrong, Teresa Rosell Nicolas, Yoshiko Takebe, Marton Mesterhazi, Jonathan Bignell, Llewellyn Brown, Laurens De Vos, et al.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 L' Harmattan	5. 総ページ数 168
3. 書名 Influencing Beckett / Beckett Influencing	

1. 著者名 Mariko Hori Tanaka, Thirthankar Chakraborty, Juan Luis Toribio Vazquez, John Fletcher, Mary O' Byrne, Wei Zheyu, Laurens De Vos, Arka Chattopadhyay, Mischa Twitchin, Dirk Van Hulle, Pim Verhulst, et al.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Bloomsbury	5. 総ページ数 219
3. 書名 Samuel Beckett as World Literature	

1. 著者名 小菅隼人、黒沢文貴、神山彰、北野雅弘、萩原健、熊谷知子、田中里奈、稲山玲、森村泰昌	4. 発行年 2020年
2. 出版社 慶應義塾大学アート・センター	5. 総ページ数 185
3. 書名 慶應義塾大学アート・センター / Booklet 28 象徴と実在の間 : Royal Bodies	

1. 著者名 Peter Eckersall, Helena Graham, Hayato Kosuge, Andy Lavender, Marvin Carlson, Emma Willis, Jennifer Joan Thompson, Mark Fleishman, Ong Keng Sen, et. al.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 386
3. 書名 The Routledge Companion to Theatre and Politics	

1. 著者名 川成洋、吉岡栄一、伊澤東一、チャールズ・モウズリー、須田篤也、山根正弘、白鳥義博、長尾輝彦、小澤喬、久保陽子、木村聡雄、小林清衛、堀真理子、藤本昌司、奥田穰一、今岡直美、古山みゆき	4. 発行年 2017年
2. 出版社 悠光堂	5. 総ページ数 389
3. 書名 英米文学に描かれた時代と社会 シェイクスピアからコンラッド、ソロー	

1. 著者名 堀真理子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 280
3. 書名 改訂を重ねる「ゴドーを待ちながら」 演出家としてのベケット	

〔産業財産権〕

〔その他〕

伊藤ゆかり、論考「亡霊の演劇と演劇の恐怖」、『早稲田文学』、2021年秋号、310 - 317

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	堀 真理子 (HORI Mariko) (50190228)	青山学院大学・経済学部・教授 (32601)	
研究分担者	小菅 隼人 (KOSUGE Hayato) (40248993)	慶應義塾大学・理工学部(日吉)・教授 (32612)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	常山 菜穂子 (TSUNEYAMA Nahoko)		
研究協力者	穴澤 万里子 (ANAZAWA Mariko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関